Special Interview

住民が安心して暮らせる地域の実現のために

～提案実現までの1年間を振り返って～

ー薬局存続の危機を救った起死回生の提案ー

地域住民が安心して暮らせる環境を提供するため、地域住民の生活に必要不可欠な薬局を存続したい。そんな思いから提案※した萩市の池内課長補佐、内閣府地方分権改革推進室で提案を担当した安川調査員に1年を振り返ってもらいました。

※へき地等における管理薬剤師の兼務要件の明確化により、地域医療の継続に寄与（平成30年管理番号7（詳細はP10～）をご覧ください。）

内閣府
地方分権改革推進室
調査員 安川 勇太
（千葉市から派遣）

有限会社杉山薬局
代表取締役
杉山 正康 氏

萩市保健部
地域医療推進課
課長補佐
池内 剛 氏

“藁をもつかむ思いで相談しました”

―提案をされたきっかけを教えてください。

池内：地域住民にとって必要不可欠な薬局を存続するため、へき地においては特別に管理薬剤師の兼務について認めてもらえるよう県に要望することとしましたが、県からの回答は厚生労働省に照会したが認められないとの内容でした。窮地に追い込まれる中、本市地方分権担当課から地方分権改革提案募集方式を活用してはどうかと薦められ、藁をもつかむ思いで相談することにしました。

安川：池内さんの地域の方々のために何とか薬局を存続したいという想いがひしひしと伝わってきたので、私も提案の実現に向けて全力で頑張ろうと思いました。

“提案前は小さな自治体の声をくみ取ってもらえるか不安でした”

―提案を実現していくため、どの点に力を入れましたか。

池内：薬局が地域での生活に必要不可欠なインフラになっていることを理解してもらうため、へき地の事情を高齢化率の高さや薬局・薬剤師の数について全国と対比して説明することや、診療所から離れた薬局に行くことになった場合の地域の不便さを切実に伝えることに努めました。

安川：そのような想いのこもった資料やデータであったので、厚生労働省に切実さが伝わったのだと思います。

―実際に提案をしていかがでしたか。

池内：提案前は、敷居が高く、小さな自治体の声をくみ取ってもらえるのか、提案が実現するにしても相当な時間がかかるのではと思っていましたが、いざ実際に提案してみると、安川さんはこちら側に寄り添って親身に事情を聞いて、提案の実現に必要な助言をしてくれました。そして何より一番印象に残っているのは、薬局の経営体力すなわち提案が実現するまでの時間を意識されておられる点でした。実際に当該薬局からは1年を目途に今後の対応を検討しなければならないとの意向が示されていたので、残された時間は余りありませんでした。

安川：関係府省ヒアリングでも、厚生労働省に萩市の支障が差し迫ったものであり、時間をかけて検討していては元も子もなくなる現状を強く訴えました。

池内：内閣府分権室の迅速な対応は想定外のもので、大きな驚きと感激を受けました。

―提案の実現は順調なものでしたか。

池内：いいえ、いよいよ実現できるかと思った段階で、しばらく進展のない期間がありました。再び県要望の時期を迎え、本市はこの提案を重点項目に格上げして県に対して強く要望する一方、内閣府分権室においても、厚生労働省に対して通知を出すように働きかけてくれました。

安川：萩市としても単に提案して終わりということでなく、重点項目として県に要望されるなど真剣に取り組まれており、そのような姿に私も励まされ、もう一押し、という感じで、厚生労働省に対して早く通知を出すよう粘り強く訴えました。厚生労働省の担当者も、ほぼ毎日のように私から電話、メール、訪問を受けて、うんざりされたかもしれません。（笑）

“関係者の熱意が伝わった。提案募集方式は持続可能な社会を創造するツール”

―振り返って、感想をお聞かせください。

池内：今回の提案は、1年以内に実現することができました。これも全てこれまでの地域の方々の御努力と多くの関係者の熱意や御尽力の賜物です。内閣府分権室の対応はとても親身で迅速でした。全国には、萩市のように様々な事情を抱えている自治体があるので、提案募集方式は持続可能な社会を創造できるとても有効なツールだと思いました。

安川：相談を受けた時点から切実な状況が見て取れ、絶対に実現しなければならないと考えていましたので、提案が実現でき、本当にうれしいです。実際に萩市を訪れ、地域の薬局の大切さを感じました。とても感慨深いです。